



明治四十二年に、長崎中学校に入ったとき柔剣道の校内大会があったのです。紅白二組に分かれて試合があるわけです。兄正親はこの年卒業、私はこの年入学で入れ違いに入学したのですが、兄が「試合のときは下のほうから出て大げいなぎ倒せ」というのです。私もそのつもりで試合のときは下から出て大げいなぎ倒すつもりでいたのです。ところがいよいよ校内大会が開かれることになり、その番付を見ると私の名前は一年生のところにはないのです。上から何番目という五年生のところにあつたのです。試合は最初は下手な一年生から始まり、順を追って後になるほど上手な者が出るわけですが、どうしてもそんなになつたのかといえば、上級生の上手な人たちが私を知っていたのです。私は中学に入ってから学校ではもちろん道場にも通わず、練習もしなかつたのですが、上級生たちが、私が少しやっていると知っていたのです。私自身は上級生を誰も知らないのですが、上級生が「こんど中根の弟が入学している」ということを知っていて、そういう上位にならべていたのです。私と同じ一年生たちはもちろん、一般の人たちも一年生が五年生の上位にならべてあるのを見てびっくりしていたそうでした。兄は「下から出てなぎ倒せ」といったのですがこれではそんなことはできません。

いよいよ私が出る番になつたのです。一年の同級生安田義貞君などは「一年の代表が出るまでは帰らない」といつて見ていてくれたのです。こっちは一年生、相手は五年生、今の高校二年生ですから身体が違うのです。私は小さくて背丈で並ぶと、私の組では下から三番目か四番目ぐらいで非常に小さかつたので